

29P-am07

当院における経口血糖降下薬、特にメトホルミン処方量の推移と薬剤指導の留意点
○ 瀧 聡一郎¹, 泉 智謙², 中村 奈月¹, 中村 英助¹, 鎗水 浩治¹(¹中村病院薬,
²そうごう薬局)

[目的]2010年5月、メトホルミンの高用量投与が可能となり、腎・肝機能障害者、高齢者への投与が禁忌でなくなったため、乳酸アシドーシスの発生が増える恐れがでてきた。また、DPP-IV阻害薬が2009年12月に発売されたこともあり、経口血糖降下薬(以下 OHA という)の選択や使用量、併用剤等が変化してきており、服薬指導上注意項目の見直しが必要になってきた。このため、当院における OHA の処方量の推移を調査し、その結果に基づいて薬剤指導を実施した。[調査方法]2009~2012年の各6月期と2012年10月の計5回に当院の門前薬局の OHA 使用量を錠数で調査し、薬剤の種類ごと(薬剤規格は考慮せず)に比較検討した。[結果]2009年6月の OHA 使用量を100%としたときの2012年10月の使用率は、SU薬74.7%、グリニド薬24.1%、TZD 58.4%、 α -GI 86.1%に減少したのに対し、BG薬は240%と増加がみられた。DPP-IV阻害薬は2010年6月を100%とすると、234%に増加した。2012年10月時の総使用量に対する使用率でみると、SU薬16.9%、グリニド薬0.9%、TZD 3.8%、 α -GI 25.2%、BG薬25.6%、DPP-IV阻害薬25.6%となった。[考察]DPP-IV阻害薬、BG薬は、単剤では低血糖を起こしにくいとされるが、多剤併用が多くなってきており、低血糖指導は今後もやはり重要である。BG薬に関するシックデイ時の対処方法等はまだ認識が低く、家族や身の回りの世話をしている人達への指導を一層強化する必要があった。